
ボクのカケラ

霧咲 ココロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ボクのカケラ

【Nコード】

N1432F

【作者名】

霧咲 ココロ

【あらすじ】

僕は君がどんなものよりもずっとずっと愛しかった。詩のような短い短い物語、切ない恋の物語です。

空白の線（前書き）

すみません、六百字いつてません。

短編でもよかったのですが、一応続きものなのでこのような形をとりました。

作者は初めて恋愛ものを書きました。

というわけで、至らないところもあると思いますが許して下さい。
これでもがんばって書きました。

空白の線

『愛しい』を

教えてくれたのは

君でした。

《空白の線》

君はいつか教えてくれたね

僕が『コイ』という字を間違えたとき
君は笑って教えてくれた

僕が書いた字は『コイ』ではなく『ヘン』だった

たしかに似てるよねと
澄んだ鈴の音のように笑って
君はノートの隅のほうに

『恋』と書いてくれた

その時の笑顔を
僕は今でも覚えています

わたしは旧字のほうが好きだなと

彼女はその横に

さらさらとえんぴつで新しい字を書き込んだ

『戀』

女の子らしい綺麗な字だと思った

『いとし　いとし　と

いう　　こころ』

それが彼女の教えてくれた理由

僕はそれだけで

この字が大好きになった

僕がそういうと

君は真夏のひまわりのように

微笑んでくれた。

僕はそれだけで

幸せだった

雨の涙

今日もまた

優しい雨が降る。

《透明な糸》

君は

今どうしているだろうか

そればかりを考えていた

このところずっと

最近

何をするにも君が浮かぶ

たとえば

「誕生日プレゼント」

別の人の誕生日なのに

『もし

彼女にあげるならば』

『彼女にはこんなのが

似合うんだろっな』

そんなことばかり考えてしまう

僕はどうしたのだろう

わからなくなつて、

あわててしまつて

でもどうしようもなく彼女が恋しくて

僕は途方に暮れた

そんなある日

僕はふと窓の外を見た。

透明な雫が落ちてきた。

雨。

冷たくて綺麗な、穏やかな雨だった。

僕はそつと窓の向こうをのぞいた。

雨はもともと好きだった

ゆつくりと本を読む時間ができるから

でも

もっと好きになった。

君の名前と同じだから

雨が降っていると
ずっと君と一緒にいるような気分になる

激しい冷雨も
優しい慈雨に変わる

あめあめふれふれ
ずっとふれ

僕はそう願う。

赤いライン（前書き）

現在手直し中でございます。

「あれっ？なんかこれ前と違うね？」と思われた方々、正解です。
アタックチャンスはございません。

赤いライン

君が

大切だと知った日

《赤いライン》

君とは

もうすぐお別れ

そういう日が

近づいていた

お別れの日

君の名前と同じ天気だった

帰り道

忘れちゃったよと無邪気に笑う君と

一緒に傘に入って道を歩いた。

純粹なキラキラと光る言葉をくれる君を見て

きつとまた会えるよと言つ君を見て

気づかれないように

涙を流していた君を見て

それでも

無理して笑おうとする君を見て

『愛しい』

と思つた

とても

とても

愛しかった。

愛しい君は

愛しい君で

いとしいきみは

かなしいきみで

恋しく慕わしい気持ちと

嘆いても嘆ききれない気持ち

同じ字なのに

意味はまったく正反对で

相反する気持ちが

いっぺんに心の中に流れてきた

哀しくても

嬉しくても

何よりも純粹で

何にも代えがたい

たったひとこと

『また会おうね』

約束したから

きっとまた会える

君は約束を破るような子じゃない

だから

僕は待つんだ

いつか君に会える

最高で

一番純粹な

その日まで

夜の光（前書き）

ユニークアクセスが200人を突破いたしました。

それもこれも皆様のおかげでございます。

作者は心よりの感謝を申し上げます。

これからも末長いご愛読をお待ちしております。

更新は遅いですけどね。
ほんっとすみません！

夜の光

キミの涙が

悲しみが沁みた。

《夜の光》

僕は君を失った

君が涙を流しながら笑った
その次の日

君は遠くへ行ってしまった

覚悟はできていたつもりだった

でもやっぱり

君の涙が沁みた

悲しみが沁みた

ちゃんと覚悟できていたはずなのに
僕の心は小さな傷ができていた

やっぱり

哀しかった

去り際にもらった

栞を眺める

薄い空色の紙をラミネート加工した
薄い栞だった

中には押し花が入っていた
蒼い花がふたつ

ひとつは道のそばでよく見る小さな碧い花

もうひとつは見慣れない紫がかった淡い藍の花

僕は図鑑を開いた

彼女がくれた最後の贈り物のことを
少しでも知りたかったから。

碧い花は『オオイヌノフグリ』 別名『星の瞳』
花言葉は『信頼、女性の誠実』

淡い藍の花は『ルリマツリ瑠璃茉莉』
花言葉は『密かな情熱』

ほんのりと胸が熱くなった

くるりと栞を返すと
そこにもまた小さな花の押し花が貼ってあった

僕もこれは知っていた

最初気づいたときは
目頭が熱くなって
ぼろりと雫が落ちた

和名『勿忘草』
わすれなぐさ

本来の名前は『Forget - Me - Not』

その名前はそのまま花言葉を表している

その花言葉は

『私を忘れないで』

絶対忘れない

君のこと。

ずっと

いつまでも。

星の光に照らされて
僕の目から落ちた涙はキラリと光って消えた。

嘆きの疑問

ただ一時忘れよう。

きみのかなしみだけ。

《嘆きの疑問》

ふとした瞬間に思い出す、君の笑顔。

艶やかな黒い髪、淡雪を思わせる君の白い肌、
そして静かにきらめく漆黒の瞳。

あの時の僕は、君を思い出す度にちくりと胸を痛ませて、それでも
君を忘れまいと痛みに耐えた。

バカだった。

ボクはどうしようもないほどバカだったんだ。

痛みを感じることもなんて

何もなかったのに

必要

なかったのに。

誰も僕を哀しませてなんかいない。

僕が勝手に痛い痛いと言っていたただけだ。

これ以上ないほど我が侘で

それ以上ないほど馬鹿だった。

どうして彼女がそばいいないのか

どうして一緒にいることができなかったのか

どうして、どうして…

そればかり。

意味のない疑問。

苦悩して苦悩して

でも答えなんかひとつも出やしなかった。

それをまた悩んでね。

悪循環が続いたよ。

若かったんだ。

そう、それこそ幼い子供みたいに。

だからね

忘れることにしたんだ。

哀しいと思うことを

君を想うことを。

今となつては

微笑ましい思い出だ。

ねえ、君はどう思う？

今こうしていると

そんなことも忘れかけそうで
ちよつとだけ怖かつたんだ。

だから君に問いかけるよ。

君はいま幸せかい？

僕？

僕はこれ以上ないほど。

「しあわせだよ。」

嘆きの疑問（後書き）

前回更新は111日前って…。

すみませーん！

恋愛物語って難しいですね！（↑黙れ）

話短いのになんなんでしょうねこの作者は。

あゝご意見ご感想まだまだ募集しています。

どしどしご応募して下さいーい（↑読者プレゼント?!）

透明な会話（前書き）

さつき見たら、ユニークアクセスが450人を超えてたというね。
皆さま、誠に申し訳ございません。

でも作者も現在宿題が オワンネ¥（＾o＾）/オワタ 状態でも
うなんというか小説だけが息抜きというかここによこによ…

まあこのお話でこの物語も終わりですので、なにとぞご容赦くださいませ。

透明な会話

この手に抱く君が

雪のように

溶けてしまうのではないかと

僕は

どれだけ恐れたことだろう

さみしい、と
くるしい、と

幾日も

幾月も

幾星霜

思い続けたからこそ

積もりに積もったその思い

手に入れたときには

逆に悲しくなるくらい

いとおしかった

「どうして？」

と君は聞く

「悲しくなんかじゃないじゃない」
と君は笑う

でもね

こうは思えないかい？

たくさんたくさん想ったからこそ

その重さに押しつぶされた時

どうしようもなくなってしまうんじゃないか

ずっとずっと想い続けてきたからこそ

その人を失った時の喪失感

はどうしようもなく大きいんじゃないか

ってね

それでも君は微笑んで

もう一度僕に寄り添って

こう言ってくれる

「失うことなんてない」と

「だって私はあなたのそばを離れるつもりはないから

一生ね」

って。

だから僕も

それにこたえよう

君がそう言ってくれるなら
僕だって言えるはずさ

「一生とは手厳しいな
少しも離してくれるつもりはないのかい？」

失敗した

どうして僕は
大切な時に限ってこうも口下手なのか

「ええ絶対」

いたずらっぽく笑う君を見て
僕も破顔した

「だったら僕も離すつもりはないね
一生どころか永遠に」

生まれ変わったってね」

「それはちょっと困るかも」

「ふふ、それくらい、もう離したくはないってこと」

幸せだ

「ねえ」

「なあに？」

「幸せ？」

「幸せじゃないなんて、言えると思う？」

「僕は無理だな」

「私もよ」

ああ、
幸せだ。

透明な会話（後書き）

203日間更新ないってどうなのかな作者として。
ダメですねいろんな意味で。

『ボクのカケラ』は一応これで完結となります。
じつはこの『なろう』の中で（短編を除き）作者が初めて完結させた話でもあるのです。
わー、なんか感慨深いや。

最初は詩でもなく、小説でもなく、正直作者もカテゴリー的にどこに入れたものか非常に悩みました。そしてその選択肢には何故かコメディもあつたと言う謎。（コメディ要素あつたか？これ。あ、あつたわ。ここだ）

まあそんな困難をも乗り越え、締め切りという縛りのないなかやつたらこんなですよ。

あつはつは、やっぱり人間ちつたあ鎖がなきゃダメなんですね。

といわけで、読んでくださっていた方々、そしてここまで読んでくださった皆さま、本当にありがとうございました。

心よりの感謝と尊敬を送ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1432f/>

ボクのカケラ

2010年10月11日06時02分発行